

## トピックス



### 世界天文年、はじまる

国立天文台天文情報センター長  
渡部 潤一

ちょうど400年前の1609年、イタリアで宇宙の扉が新たに開かれました。科学者のガリレオ・ガリレイが、遠くが近くに見えるという噂の「望遠鏡」を苦心して自作し、それで宇宙を眺めはじめたのです。今から考えると、本当におもちゃのような小さな望遠鏡でしたが、そこに彼が見たものは驚くべき天体の姿でした。水晶の球のように滑らかだと考えられていた月は、凹凸だらけで、まん丸い盆地のような窪み（クレーター）がたくさんありました。木星のそばには、4つもの星（ガリレオ衛星）が、木星を回っていました。金星は月と同じように満ち欠けをすると同時に、その大きさを日に日に変えていきました。完全無欠の球体と考えられていた太陽の表面には、姿を変える黒い斑点（黒点）があり、それが太陽の自転と共に動いていきました。そして、恒星天球上に描かれた白い「天の川」には、肉眼では見えない無数の星がきらめいていたのです。こうして、誰も見たことのない宇宙の姿を捉えたガリレオは、興奮さめやらぬままに『星界の報告』を書き上げ、地動説への支持をますます強くしていったのです。

2009年は、ガリレオが発見を成し遂げた1609年から数えて、400年の節目の年です。これを記念して、国際連合、ユネスコ、国際天文学連合は、2009年を「世界天文年(International Year of Astronomy: 略称 IYA)」と決めました。世界中の人々に夜空を見上げてもらい、宇宙の中の地球や人間の存在に思いを馳せ、かつてのガリレオがそうであったように、それぞれ自分なりの発見をしてもらうことを目的としています。THE UNIVERSE: YOURS TO DISCOVER「宇宙…解き明かすのはあなた」というスローガンのもと、世界の135を超える国と地域で、天文学と科学に関する行事が、さまざまな規模や形態で展開され

つつあります。

日本では研究・教育・普及など全国の幅広いメンバーによる「世界天文年2009日本委員会」のもと、様々な企画が立案され、実施されます。世界的に共同で行う企画と、日本委員会が独自に主催する企画、それに地方の科学館・プラネタリウム・公開天文台・同好会などが主催し、日本委員会が認める公認企画に分かれています。主催企画で人気があるのは、「君のガリレオ」プロジェクトです。これはガリレオのように小望遠鏡を作って、実際の天体を観察する教育プログラムで、指導者さえいればインターネットで参加できます。20人以上の団体であれば、望遠鏡制作キットも安くなるというおまけつきで、学校やPTAなどのイベントにはうってつけでしょう。また、7月22日に南西諸島や小笠原の硫黄島で見られる皆既日食では、全国にその様子を中継する企画が予定されています。さらに地域限定ですが、国立科学博物館を皮切りに仙台、新潟、名古屋、大阪を巡回する「ガリレオの天体観測から400年・望遠鏡が切り開いた宇宙」企画展（日本天文学会100周年事業と共催）も開催予定です。ギリシア神話に隠れがちなアジアの星の神話伝説を集めようというプロジェクトや、星の本を紹介する星空ブックフェア、日本ならではの独自キャラクター「ガリレオくん」の作成、各種シンポジウムなどが目白押しです。「めざせ1000万人！ みんなで星を見よう！」は、プラネタリウム・公開天文台だけでなく、同好会や天文クラブの人たちがボランティアになって、多くの一般の人に星を見てもらうというプロジェクトです。

ところで、読者の皆さんの関係する学校にも、埃をかぶった天体望遠鏡がありませんか？世界天文年を機会に、そんな望遠鏡を引っ張り出し、多くの子どもたちに星を眺めてもらい、自然への興味と科学への関心を応援してみませんか。詳細は、世界天文年のホームページをご覧ください、ぜひ皆さんにも参加して頂ければと思います。

世界天文年ホームページ  
<http://www.astronomy2009.jp/index.html>